

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書 23 章 44-49 節＞  
聖書的意味合いを持つ言葉が詰まっている箇所。それがここを解く鍵。

1 (44-45a) 「闇」は人間の罪の暗さを示す。その最大の暗さの時。

「既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた」(44-45a)、これを読むと、「どうしてそんなことがあるのか。日蝕だったのでは」といったことを考えるかもしれませんが。しかし、すでにイエス様は、「だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている」(22:53)と語っておられます。つまり、ここを読んで考えなければならない暗さ・闇は世の罪の暗さ、人間の霊的暗さであり、イエス様を襲った闇は私たち自身の罪の重さなのです。

2 (45b-47) 主イエスに平安が訪れたことを示す 45b-47 節の内容。

何も知らないで読めば、ここに出て来る「裂けた」「叫んだ」「息を引き取られた」といった表現は何か不吉で悪いことが起こったように思うかもしれませんが。しかし全く逆です。神の子イエスを十字架につけて人間の霊的暗闇が頂点に達したその時、神様がその暗闇を蹴散らすべく上から光を差し込まれたのです。それが 45 節の表現の意味です。よって、それを見て(原文には 46 節の頭に「そして」の語があり)主イエスは平安を覚えて全てを終えられたのです。それが 46 節の表現から聞き取らなければならない意味です。百人隊長が、「本当に、この人は正しい人だった」(47)と語った中の「正しい」とは、旧新約聖書の中で「神の義」(私たちが勝手に思う義ではなく)を指す独特の語で、その義を、つまり神の義をイエス様が為したことを百人隊長は深く悟ったのです。だから百人隊長は神を賛美したのです。

3 (48) 「胸を打つ」の意味は少し分かるかも。ではどうする？

この語は 18 章 13 節で神様の前に罪を悔いる徴税人の言葉として出てきます。人々は自分たちの罪に気づいたとルカは伝えているのです。この時はそこまでです。どうしていいか分からず、ただ帰って行くことができただけです。しかし、これがペンテコステの日の回心の下地になったと考える人もいます。そうかもしれませんが。聖書の神様は、この御子イエス・キリストの死によって自分の罪に気づき、神様の方に向き直して生きる(回心)者を罪赦し、共に歩んで下さる神様だからです。この神様は私たちにもそうすることを求めておられるのです。